第9章

ジェンダー情報の調べ方サマーセミナー報告

石倉 香鈴

1 はじめに

国立女性教育会館（以下、NWEC）では、第5期中期目標（令和3年4月～令和8年3月）において、「若年層に対して男女共同参画意識の醸成を図る取組の充実を図る」こととなっている。そのため、新たな取り組みとして、令和5年度に大学生を対象とした「知らないなんてもったいない！ジェンダー情報の調べ方サマーセミナー」（以下、サマーセミナー）を、試行的に1泊2日で開催した。

本稿では、サマーセミナーの取組を記録するとともに、アンケートやインタビューの結果から本セミナーの成果を紹介する。

2 企画のポイント

女性教育情報センター・Winet等の利用促進

NWEC内の女性教育情報センター（以下、情報センター）、女性アーカイブセンター、女性情報ポータル“Winet”等のジェンダーに関する情報資源を活用し、次世代を担う大学生・院生へのジェンダーに関する研究・学習の支援を行うという趣旨で企画した。

若年層へ向けた学習支援

研修では、実際に情報センターで資料を見ながら、情報の探し方を学ぶことを目的とした。また、ジェンダー領域に関心のある学生同士が集まることで、情報交換や仲間づくりの場として機能することもねらった。

3 プログラム

2日間にわたる本セミナーのプログラムは、実際に来館して情報センターを活用することで、参加者の卒論やレポートを執筆する一助になることを意図している。

また、NVECにおける1泊2日の集合研修を有効に機能させるため、事前にオンラインで、女性情報ポータル“Winet”を使ったジェンダーに関する文献情報の探し方について情報提供を行う「ジェンダー情報の調べ方 オンライン相談」を受講することを必須とした。

表1 日程

日	時間	内容
9/7 (木)	13:00～13:10	オープニング
	13:10～13:50	アイスブレイク「お互いを知ろう！」 ファシリテーター：澤田 英里子 国立女性教育会館 事業課専門職員
	13:50～14:20	情報提供「NVECの情報資源を活かした論文作成」 講師：石倉 香鈴 国立女性教育会館事業課係員（博 士後期課程在学中）
	14:30～15:30	講義「ジェンダーに関するレポート・論文の書き方基 礎知識」 講師：菊地 栄 立教大学大学院兼任講師 博士（社 会デザイン学）
	15:40～16:30	女性教育情報センター・女性アーカイブセンター見学

Ⅲ NWEC 実践報告

日	時間	内容
9/7 (木)	16:30 ~ 18:00	情報収集／テーマ相談会 チューター 萩原なつ子 国立女性教育会館理事長（立教大学名誉教授） 博士（学術） 中山まき子 京都女子大学ジェンダー教育研究所・特定教授 博士（学術） 菊地 栄 立教大学大学院兼任講師 博士（社会デザイン学） サポート：国立女性教育会館 情報課職員
	19:30 ~ 21:00	交流会
9/8 (金)	9:00 ~ 12:00	情報収集とワークシート作成・発表
	12:00 ~ 12:10	クロージング

1日目のプログラムでは、参加した学生が論文を書くための基礎として、「ジェンダーに関するレポート・論文の書き方基礎知識」の講義を、立教大学兼任講師の菊地栄氏が行った。参加者は、テーマの設定、仮説（問い）の立て方、タイトルのつけ方、先行研究の収集・分析、引用の方法等を学んだ。あわせて、石倉が「NWECの情報資源を活かした論文作成」と題して、自身が働きながら学ぶ大学院生として、どのように情報センターの資料を活用して論文を執筆したかを報告した。

このような基本的な考え方、資料・情報の探し方の情報を共有した上で、各自で情報センターを実際に使う時間を設けた。その際、NWEC情報課職員が、図書や雑誌、新聞資料、統計データ等の情報収集のサポートを行った。また、テーマが決まっていない場合や、どのような資料を収集したらよいか相談したい者のために、ジェンダー分野を専門に研究をしている3名のチューターに相談できる場を設けた。「どのような視点を持ってテーマを決めたらよいか」、「自分の興味関心を、どう学術的に転換しアプローチしたらよいか」などが相談され、具体的なアドバイスがなされた。

夕食後に開催された交流会は、参加者同士、そしてチューターが、さらに近い距離で話すことができる場として設定した。ジェンダーに関する興味が

ある者同士の交流は非常に盛り上がり、21時を過ぎても話し込むグループもあった。

2日目は、1日目の続きとして、情報センターでの資料収集、チューターへの相談の他、ワークシートに今回のセミナーで見つけた資料や進捗を書く個人ワークを行った。台風が近づいていたため、2日目朝に残念ながら2人が帰宅した。終了時間を1時間前倒し、最後に2日間を通して新たに発見したこと等を1人ずつ発表してもらった。

4 研修の成果と評価

参加者の内訳（学年等）

試行ということもあり、定員15名で募集したところ、35名の応募があった。しかし就活、院試、体調不良等で11名のキャンセルがあり、当日の参加者は、24名。内訳は、性別では女性18名、男性4名、それ以外2名、学年別では学部2年生6名、学部3年生8名、学部4年生5名、修士課程1名、博士課程4名である。地域は首都圏の大学生が多かったが、岩手県・大阪府・山梨県・福岡県からの参加者も5名いた。

参加者アンケート（セミナー直後）による評価

セミナー実施直後のアンケートは、全日程参加した22名から回答があり、非常に満足した68%、満足した32%で、100%の満足度を得ることができた。特に「今まで大学の図書館では得られなかったジェンダーに関する情報や考え方を得られた」「テーマ相談会で先生に相談できたことが有用だった」「同世代でジェンダーに関心がある人と出会えた」などの記述があり、情報センターでの情報収集の機会、ジェンダーに関する学習支援、仲間づくりの場の提供ができたと考えられる。

終了後のネットワーク形成

終了後、オンラインコミュニティを形成するのに便利なアプリを使って、参加者同士で連絡が取れるグループを立ち上げたとの連絡があり、本セミナーがネットワーク形成に役立ったことがわかる。

フォローアップ調査（アンケート調査）

実施から1年後の2024年の7～8月にかけて、フォローアップ調査を実施し、11名から回答を得た。「セミナーで学んだことは、どの程度役立っているか」という質問に対し、「非常に役立っている」5名、「役立っている」6名の回答が得られた。

「セミナーの内容で、役立った内容（複数回答可）」は「卒論・レポートの書き方（構成・引用方法など）」5名、「卒論・レポートのテーマ決定」4名、「ジェンダーに関する情報収集の方法」9名、「参加者同士のネットワーク作り」6名となっている。

「セミナーで学んだことを、どのような場面で活用したか。（複数回答可）」という質問に関しては、「卒業論文の執筆」5名、「レポートの執筆」5名、「ゼミでの発表」1名と、当初意図していた学習の支援に寄与することができていたことが確認された。また、「大学の課題以外の活動（サークル・社会活動等）」は6名の回答があり、当初想定していなかった学習以外の活動にも有用であったことがわかる。

「セミナー受講後にWinetを使ったか」という質問に関しては、72.7%（8名）の回答があり、参加者がWinetを使っていることが確認でき、企画で意図していた「情報センター・Winet等の利用促進」にも効果的であったことがわかる。

フォローアップ（インタビュー調査）

サマーセミナーを受けてどのような利点・成果があったのかをより具体的に確認するため、フォローアップ回答者の中から協力を得られた3名にイン

タビュー調査を行った。インタビューでは、参加した動機やサマーセミナーを受講したことによる変化について質問した。以下、簡単に紹介する。なお、3人は都市部の大学生である。

・Aさん～本格的な勉強の前に～（当時大学2年生）

参加動機は、「大学ではまだ専門的な内容に入っておらず、所属しているコースにジェンダーをテーマに研究している教員がいなくなったので、専門的に勉強できる場がほしかった」ということである。参加して得た知識は、大学2年生ということもあり、レポートの課題に役立ったという。例えばジェンダーに関するレポートの課題について、NWECの文献情報データベースで検索をして、どのような資料があるのか把握することで、より詳しい視点をもって取り組むことができた。

さらに、大学教員であるチューターに相談するという経験により、教員に接することに対するハードルが下がり、自身の大学教員にも「相談してみよう」と卒論に向けてのスタートになっていた。

・Bさん～課外活動へのチャレンジ～（当時大学3年生）

Bさんは、サマーセミナーで学生同士のネットワークを作れたことが印象深かったという。参加して知り合った友人とはジェンダーの話をできる関係が作れ、その後もつながりを持てたのが大きな収穫だった。

参加者には様々な社会活動をしている学生がおり、Bさんはその参加者から刺激を受け、自分も何か活動したいとエンジンがかかった。参加後、ある女性団体のメンバーとなり、映画上映会を企画するなどの活動をしている。他の参加者たちが社会活動をしていることを知ったことで、自身も女性団体の活動に参加するきっかけとなっていた。

・Cさん～卒業論文の執筆のために参加～（当時大学4年生）

Cさんは卒業論文に取り組みつつ、大学院入学を視野に入れて勉強をしている中、サマーセミナーに参加した。

参加時には卒論を一度書き終え、そこからどのようにアップデートしようか悩んでいた。また、Cさんの所属する学部は統計学が専門で、ジェンダー

を専門とする教員がおらず、ジェンダー研究は独学で勉強していた。ジェンダー分野について相談できる環境になかったため、サマーセミナーでジェンダーの専門家から助言を得られたことが大変役立ったという。テーマ相談会でチューターからアドバイスをもらったことで、卒論のブラッシュアップができ、最終的には卒論の一部を学会で発表するという大きな成果につながった。

5 考察

アンケートやインタビューから気づかされるのは、ジェンダーに関して学習している者は、専門の研究者、資料、学生数の点で有利と思われる都市部の学生であろうと、孤軍奮闘しており、ジェンダーに関する学術的な情報、勉強できる場所、情報交換できる仲間を求めている、ということである。

今回の参加者からは、大学にはジェンダーに関する専攻のゼミ、蔵書、教員が少ないという声が複数寄せられた。あらためて、本セミナーは、ジェンダー領域に関して興味関心はあるものの、なかなか専門的に学びを深める環境にない学生のニーズに合致した場となっており、意味のある企画であったことが確認できた。

さらに、学生はネットやSNSなどですでにネットワークを持っているのではないかと考えていたが、意外にもそうではないことに気づかされた。インタビューでは、「これだけジェンダーについて勉強したい人が集まっていることに驚いた。活発に活動している同年代の人に出会えて驚きつつ、励まされた」という感想も寄せられた。直接仲間と出会うことが、その後のエンパワメントにつながり、学内だけの人間関係では得られない、学びや仲間を作ることができていたことは大きな成果であった。

また、情報提供を通じた学習支援をする場合は、NWECに限らず、全国の男女共同参画センターでも様々な規模で設けることが可能だろう。ささやかな学生の集まりに見えるが、参加者はサマーセミナーに参加したことをきっ

かけにして、自分の関心を磨き、新たなステップに向かって挑戦していた。ジェンダーに関する専門図書館の存在意義の1つとして、ジェンダー領域の学習を始めた学生に対しての知識の提供がある。本セミナーの企画・実施によって、専門的な知識・情報や、仲間との出会いの場を提供することは重要であることを確認できた。

(いしくら・かりん 国立女性教育会館事業課事業係主任)